
春色幽化帳

積み木 ウサ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春色幽化帳

【Nコード】

N9682E

【作者名】

積み木 ウサ子

【あらすじ】

俺は昔、昔のそのまた昔、犯してはならない罪を犯した。そのために化け物を助けることになった訳だが…真面目でクールな？春人と不気味で愛おしい化け物たちが起こすほのぼの妖怪物語。是非とも召し上がってみてください。

一巻 化け物の呼び声（前書き）

はじめまして（＾Ｏ＾）v

はるいろゆうけちよう

春色幽化帳よろしくお願い致します。

楽しんで頂けたら、とても嬉しいです（＾Ｏ＾ゞ

一卷 化け物の呼び声

するり…

ゆらり…

光々と焚かれる炎が見える。

濃紺の闇を切り裂く大きな炎。

幾日も幾日も燃え続けたのだろうか。

埃ぼった灰殻が夜空に導かれるように上っていた。

その中心に小柄な少年がくくりつけられている。

歳は推定五、六歳。

貧相な着物一枚に痩せ細った手足が痛々しい。

どうやら縄で全身を縛られ、身動きが取れないようだ。

炎が燃え上がる度に声を上げて、痛みを訴えている。

『…いっ…いたい…！

い…たいよお…』

その回りには艶やかな色彩をした化け物が、緩やかな踊りを披露していた。

耳慣れない音色が響き、

化け物の顔はニタリと歪む。苦しむ少年を悦^{たの}しんでいるように。

紅・蒼^{あか}・黄色…

大きい…小さいの…

姿形はみな違い、人の形をしたものから鍋が化けたものまで、個々に特徴を持っている。

そして、なぜか揃いも揃って獣のような匂いがした。油と唾液を混ぜたような嫌な匂い。

臭い。鼻がひん曲がりそうだ。

俺はあるはずもない透明な手で鼻をそっと押さえた。

『たすけて…たすけて』

化け物は踊り続ける。

月夜の晩の光を浴びて。

その光景は恐ろしく、狂人的だった。

一巻 化け物の呼び声（後書き）

どうでしたか？

初めて書いた妖怪ものだったので、投稿してドキドキしました（笑）
面白くて、分かりやすい話を目指します！
これからもよろしくお願いしますね☆

二巻 眠れぬ夜の悩み事

「…うつ…」

目を覚ますと、見慣れた天井が俺を眺めていた。
体じゅうが微かに痺れ、頭にはくらくらと鈍い痛みが響いている。

「はあー…」

何度体験しても慣れないこの感じ。
またやつらが来るのか…

いつになったら、終わるのだろう…終わることなんてないことは判
っているけれど。

それから大きく深呼吸をして、側にあった携帯電話の時刻を見る。

11午前2時22分。

いわゆる丑三つ時。

あの世のものが現れると言われる時間。

そろもゾロ目だ。

可笑しなことが起こらない訳がない。

ふいに右手首をみると、赤くただれた大きな傷あとがゆらりと浮か
んでいた。

じりじりと鉄で燃やされているような鋭い痛みが走る。

幻覚だと判っているが、腕が燃やされている現場がリアルに見える。俺は吐き気と痛さに声をあげそうになったが、歯をぐつと食いしばって痛みに耐えた。

「はぁー…」

また、奇人扱いされたら溜まったもんじゃない。もう二度と精神鑑定なんて受けたくない。

昔、理由を知らない両親が深夜に喚く息子を心配して精神鑑定に連れて行った。

そのときの情けなさと言ったら…。

もう子供じゃないんだ、俺は。

17歳の高校生。
しっかりしろよ、ほうじょうはると豊城春人。

それからまた感慨深げに溜め息をつくど、ゆっくりと瞳を閉じた。いつの間にか過去のあやまちを振り返っていた。

遠い遠い昔の、俺が生まれる前のあやまちを。

二巻 眠れぬ夜の悩み事（後書き）

春人くんは素直で書きやすいです。（笑）よろしければまた読みに来てくださいね！

三巻 秘密秘密の過去話

「俺」こと豊城春人ほうじょうはるとは昔々のそのまた昔、まだ化け物を誰もが視ていた時代、犯してはならない罪を犯した。

――祭典荒し

それは化け物の祭りの最中に、赤い炎と人の生き血を持って、化け物を襲うことだった。

なぜだか知らないが、俺が生まれた土地では化け物は赤いものと血液に弱いと言われていた。

そのため、絶対に化け物の前でそれらを見せてはいけないと、つねづね聞かされていた。

なぜならば、化け物と人間との友好関係を断てば、この世に災いが渦巻くとされていたからだ。

つまり

「祭典荒し」はけして行っではいけない禁忌だった。

ところが当時二十歳の俺はその禁忌を破ってしまった。

名を藪川疾風丸やぶかわはやてまると言い、将軍の息子だった。

恐いもの知らずの破天荒なやつで、仲間にそそのかされて、祭りを

荒らしに行った。

そこで化け物を殺し、首を取って家に戻ったそうだ。

するとどうだろう。

国は次々に崩壊していき、しまいには大量の化け物に攻められて人々もろとも消えてしまった。

その中でただ生き残った俺は、地獄の閻魔大王の元に連れていかれ、右腕に呪いの調印を受けた。

『…これは永久とわに続く呪い。

我らが滅びても消えはしない。

化け物を裏切った罰じゃ。

お前が輪廻をいくら繰り返しても忘れぬよう、腕に跡を残してやろう。

もちろん罪の記憶も一緒にな。そしてお前の義務として、化け物を救うことを命ずる。

お前は一生罪を滅ぼして、生きるのだ。

いいな、童よ覚えておれ』

それからのことは覚えていない。

たぶん釜か何かにぶちこまれて、死んでいったのだろう。

つまり、俺は藪川疾風丸の生まれ変わり。

やつに変わって未だに化け物を救う役目を担っているわけだ。

自身の意思ではなく、強制的に。

そして、化け物が助けを求めたとき、俺は夢を視る。

化け物の声が聞こえ、助けを求めた場所に魂が吸い寄せられる。それと同時に右腕の調印が浮かび上がるわけだ。

それにしても、

今回は可笑しなもんだ。

化け物が子供を虐めてたじゃないか、愉しげに。

助けを求めるのは普通、子供のほうじゃないのか？

「……ま、そのうち判るか…」

俺はあまり深く考えず、そのうちやってくる化け物のことを苦々しく思いながら、

またゆったりとした眠りについた。

できることなら会わずに済みますように・・・

頭の中はそんな不可能な願いでいっぱいだった。

三巻 秘密秘密の過去話（後書き）

やっとな春人くんと化け物の関係を明らかにすることができました（
^|^）

これでまた進めていけそうです。（笑）

よろしければ、またお会いしましょうね☆

四巻 主役の凡みす

じりじりと真夜中が朝に変わる。白が黒に変わるように、いつのまにかあつという間に。

眩しい光と賑やかな人々の声を聞きながら、俺は布団に潜っていた。

――日常的な光景…

低血圧の俺は朝に弱い。

そのため三十分は布団でうだうだとしてしまう。

「ん…」

それに昨晚、夜中に起こされたためいつにも増して非常に眠い。頭も痛いし、全く嫌になる。

「ああー…!!」

がばっと起きて、身支度を始めた。こうでもしないと起きられない。

ましてや今日は、

いつもと違う一日になるかもしれない。

化け物に巡り会う可能性が高いんだ。

「めんどくせえー…」

どこかで彷徨っている化け物のためにも、早く家を出なきゃならない。

家に押し掛けられでもしたら、それこそめんどくさいことになる。

はあー・・・

日常を誰よりも愛しているというのに、なぜ忌々しい罰を受けなければならぬのだろう。

「ハル、ご飯出来たってさ」

ネクタイをしめていると、涼しげな低い声が聞こえた。

振り向くと、いとこの瑞ノ江一也がひよろりと立っていた。

真っ黒な髪に、シャープな瞳。

背が高く、高校二年生とは思えないバスケット少年。

「あー…もうちょいしたら行くわ」

一也とは昔から仲が良く、高校生になってもそれは変わらない。兄弟みたいな仲だ。

今は両親の都合でうちに移住している。

「了解。先、行くから。」

あと…」

そこでニヤリと笑って、

「夜中に騒ぐのは止めてくれよ」

「は？」

「ハルの寝言は天下一品ってね。昨日は何を猫に行っただ？」

俺はさぞかし酷い顔をしていただろう。

間抜け面…

お似合いの言葉だ。

「……………！」

なんつうーこった…

騒いでたか…

途方に暮れる俺を残して、一也は笑いながら、リビングに降りて行った。

四巻 主役の凡みす（後書き）

はいいゝ…結局ね、瑞ノ江こんにちはってね（▽₁；）あははは。
春人いじられてるし。悪いヤツだ（笑）次回はまた進みます♪よろ
しく願いしますー

五巻 涙涙の最悪な出会い（前書き）

アクセス解析を見たら、たくさんの人が読んで下さっていてびっくり！！

ヤバイです、テンション上がりまくりです！（T▽T＊）／
本当にありがとうございます！

すごく嬉しくて、また頑張ろうと思えました。

五巻 涙涙の最悪な出会い

「いってきまあす」

朝食を済ませた俺たちは、学校に向かって歩き出した。
明るいう空が眩しい。

残暑が激しいこの時期は、外に出るのが億劫だが、
やっぱり晴れていれば心が弾む。

新学期からなんだか良い気分だ。

『…はっ春人さん』

突然、生ぬるい風に乗って微かな声が俺を呼んだ。

「えっ?!」

あたりをきょろきょろと見回し、それらしきものを探したが、閑静な住宅街に高層ビル：いつもと変わらない通学路の風景しか写らなかった。

「どうした？」

一也が不思議そうにこちらを見つめる。

「や、なんでもない」

俺は軽く誤魔化し、
そのまま歩道を突き進んでいった。



事件が起きたのは十字路を曲がったときだった。

何千、何万と車が行き交う中、俺は場違いな生き物を見つけた。

ライトグリーンの体に丸いしっぽ。

赤ちゃんぐらいの大きさの変な生き物。

それが信号機の上にちょこんと座っている。

顔の半分をしめている、エメラルドグリーンの瞳を動かしながら。

一見マスコットキャラクターにでも見える可愛さだが、あれはそんな生優しいもんじゃない。

…化け物だ。

「…っ！」

絶叫したいのを押さえて一也を連れて、左側の四つ角へ。

出て早々これかよ…

本当に勘弁してほしい。

朝からやつらにかまうのはごめんだ。

一也を巻き込みたくないし。

「なっ…なんだよ…」

ハル、おかしいぞ」

状況を理解していない一也は息をゼエゼエ言わせながら呟いた。
さすがのバスケット部エースも、唐突に走り出すのは辛かったようだ。

「なんでもねえーよ。
それよりがっこ…」

一也を見上げて絶句した。

頭の上に乗っかる緑の飛行物体…背中の羽をはらりはらりと動かし
て、にっこりと微笑んでいる。

『春人さん、探しましたよ』

弾けるような声で一言。

「ぎゃああああ！」

今度こそ俺は絶叫した。

五巻 涙涙の最悪な出会い（後書き）

会っちゃいましたねーハル君。

これからどのように進めているかわくわくしています。O(^O^)

O

またお会いしましょうね♪

六巻 妖子の舞い（前書き）

語句説明的な？ものです。

●夢写し：夢を操り、鏡のように見せたいものをみせること。

●妖霧：その名の通り妖気でつくる霧のこと。
これにかかったものは妖力がなければ見えない。

●醜人：妖力のない人間を化け物が皮肉った言い方。無人のほうがまし。

無人は一般人を意味する。

では、本文をお楽しみください。

六巻 妖子の舞い

『春人さん、酷いですわ。』

わたくしの前から逃げるなんて…』

当たり前だろう。

いくら使命だとしても、化け物と関わりたくない。

素性の判らぬ、不可思議な生き物なんて。

『わたくしご依頼いたしましたよね？』

口の聞けない俺を尻目にライトグリーンはぺらぺらと話し出す。

一也の頭にどっかりと居座り、和みなら話しているのが癪に触る。

一也といえば、宙を見る俺を不思議そうに見つめている。

『昨日の夕の刻に夢写しをされたでしょう？』

あの場をご覧になったでしょう？

それなのに…それなのに…』

エメラルドグリーンの瞳がきらきらと輝く。

悲しき光の舞い。

艶やかで美しい。

化け物独特の妖気の美しさだ。

『わたくしご依頼いたしましたのに…』

人はこれによって惑わされ、見え無きものにうろたえ、捕えられる。

『春人さん、聞いていますか？』

餌食になるとも知らずに。

「聞いてるさ。」

はたから見れば俺は変人だよ。」

ライトグリーンは不思議そうにこちらを見つめると、『まあ』と可愛らしい声をあげて、すらりと妖気でその場を包み込んだ。

『これで大丈夫でございます。』

妖霧は醜人には見えませぬ。私供が見えないように。春人さんのように力がなければ。』

俺は好きで力を得た訳じゃない。罰で得ただけだ。

それに化け物どもに親しまれるような人間じゃない。恨まれるなら判るが。

『さあ、ゆつくりとお話しましょう。』

鈴が鳴るような声でくすくすと笑い、俺を探してうろたえる一也を、愉しげに見つめた。

「その、『醜人』っての止めてくれない？

俺の家族なんだから。

それと一也を困らせないで。」

ライトグリーンは訝しげに眉を潜めると、『判りましたわ。』と言
って、『無人』と言い直した。

それから四つ角の裏から、妖気で造られた俺を一也のもとに向かわ
せた。

『これでよろしいでしょう？お話ししよう。』

俺は一也が学校に向かうのを確認して、ライトグリーンに向き直っ
た。

六巻 妖子の舞い（後書き）

どうでしたか？

ライトグリーン（本名ではありませんが（笑））のイメージはどのような感じですか？

私は動物的なイメージですが、しゃべり口調からして、姫ぽいかもですね。

良ければ感想で教えて頂きたいです（^O^）
判りづらいところも！

七巻 早る心は裏腹に

「で、あんた何？」

『ですから…ご依頼を…』

「そうじゃなくて。

何が化けてんのか聞いてんの。」

ライトグリーンはきょとんと俺を見つめると、またくすくすと笑い出した。

『わたくしが何であっても貴方様には関係ないでしょう。聞いてどうするのですか？』

その瞳は怪しげに揺れ、
俺の解答を弄ぶのを楽しみにしている化け物の顔だ。

「依頼を承けるか承けないか決める。」

怯むことなく言う俺をライトグリーンは鼻で笑った。

「まあ、お偉いこと。

罪人の身で大したことをおっしゃるんですね。」

「罪人なんて関係ないさ。俺のポリシーだ。あんたたちが人間を『醜人』と呼ぶように、俺だって醜いものは扱わない。」

堂々と言う俺をライトグリーンは一別し、今度は花のように笑った。

「面白い童だこと。
いいでしょう、教えてあげますわ」

そして細長い指を宙に立てた。
そこからは妖気が漏れ出て、同時に美しい新緑の葉がくるりくるりと飛び散った。

『わたくしは葉でございまする。
生まれたての初々しい葉。
貴方達を包む、夏の妖精。
醜いものなどではございませんよ、春人さん』

「ああ・・・
…綺麗なものだよな。」

瞳を大きく開き、ライトグリーンは頬を赤らめた。

『ありがとうございます。では…』

「まだ。」

あと一つ教えてくれ」

にっこりと笑う俺にライトグリーンは首をかしげた。

『春人さんは質問がお好きなこと。何でございましょう？』

「どうやって信号機から、ここまで来た？

妖気を使ってもあんな短時間では来れないだろう？」

『よくお分かりになっているのですね、わたくし達の事を。』

「まあー…ね」

『場のお蔭でございます。四つ角はわたくし達の通り道。

春人さんがここに来られたから、素早く道を通って参りましたわ』

ライトグリーンは後ろの壁をほとんど叩く。

すると紫煙が出てきた。

紫煙は化け物が残す足跡のようなものだ。

「なるほど…」

これから気を付けよう…
こっそりと呟いた。

『では、お話を聞いてくださいまするね?』

念を押すライトグリーンにこっくりとうなずいた。

『安心しましたわ。』

今頃ですが、わたくし葉ようしのものの葉詩と申します。
貴方さまについては、虹煙こうえんより拝聴致しました。』

ああ。

この前来た虹の化け物か。鬼ぽいやつだったなあ。確か。

『貴方さまにご依頼したいことは、夢でごらんになった童を助けて
頂きたいのです。』

あれ…?

やっぱり今回は可笑しい。化け物が人間を助けるなんて。

『今宵の晩、夢であちらに渡って頂けま…』

キンコーン
カーンコーン…

ん？

どこからか聞き慣れた音がする。

『何の知らせでございましょうかねえ。』

葉詩は呑気に空を見上げる。

「ん?!」

腕時計を見て思わず叫んでしまった。

「ちっ遅刻だー!!!」

『ちこく?』

呟く葉詩を残して、

俺は全力疾走で学校に向かう。

『…はっ春人さぁーん!!!』

葉詩の声が俺の背中で
響いていた。

七巻 早る心は裏腹に（後書き）

今回はいつもより長くなりました（^^ゞ

読むのに時間がかかりますね〜それとライトグリーンは葉詩さんでした。（^―^）

この名前けっこう気に入っています。

次回から豊穣学園が舞台になります。

またよろしくお願い致しますねっ（*^^*）

八巻 消失した少年（前書き）

本文には書かれていませんが、ここで高校についてちょっとした説明をさせて頂きます。

春人や一也が通う高校は「豊穰学園」と言い、小・中・高等部、大学部・大学院となる大規模な教育施設です。

ちなみにお気づきかもしれませんが、春人のみよじも「豊城」。

設定的に春人と一也の祖父が経営していることにしています。

一也がみよじが違うのは、一也の母が創設者の祖父の娘だからです。

判りづらい上にどうでもいいことですが、いちおう説明させていたかったです。

読んでいただき、ありがとうございました。

本文をお楽しみください。

八巻 消失した少年

「ハルどこ行ってたんだよっ」

二年E組の教室にそろりと入ったとたん、一也に一喝、怒鳴られた。

「…え？別にどこも」

俺は澄まし顔で一也を見つめる。

葉詩を振り切り、急いで学校に向かった俺だが、学校の一步手前、中等部校舎を前にしてあることに気づいた。

――葉詩が造った身代わりが学校に行っている…

つまり俺は学校にいるわけで、遅刻にもならなければ担任の糞親父に怒鳴られることもない。

それなら今日はさぼってしまおうかとも思ったが、葉詩に見つかり、絡まれるのもめんどくさい。

「……………」

数分考えた結果、身代わりと入れ替わることにした。

妖力で作られたものは頭がいい。

俺が教室にいるのを見つければ、主あるじの元に返るはずだ。

だから俺はぶらぶらと寄り道をしながら、学園に向かった。

学園に着いたのは四時間目が終わる数分前。

あ。

学園に着く間、どこで何をしていたかは、あまり考えないで欲しい。

「どこもじゃねえーだろ。

突然消失しておいて…」

「は？消失？」

可笑しいぞ…

教室にいる俺を見つけて、今さっき元に戻ったんじゃないのか？
身代わりはどこに行った？

ホームルーム
「H R前にいきなりいなくなっただろ？」

「H R？あー…うん」

H Rと言えば八時三十分から。そして、葉詩があれを造ったのは七時十分頃。

つまり、一時間二十分しか葉詩の妖力がもたなかったってことか…？

それとも自ら逃走した？

どういうことだよ…

これじゃあ結局、糞親父に怒られちまう・・・

勘弁してくれ・・・

「で、『あー…うん』のそのワケは？」

眉間にしわを寄せた一也がじりじりと迫ってくる。

一也の眼力ほど恐ろしいものはない。

「便所行ってた、それだけ」

まずい。

一也は探求心の強い性格だ。

ここで誤魔化せなければ、一日このことを引きずるだろう。

「…ああ？」

んな、時間かかるわけねえーだろうっ」

「やー…それがねえー…」

唸る一也を前にして、俺は頭を抱えてしまった…。

八巻 消失した少年（後書き）

今回は書いてて難しかった！（＜―＞；）
次の展開に繋げるために書いた話ですが、上手く表現出来ていない
と思います…。
次回は頑張らないと！

九巻 甘酸っぱい彼女の微笑み

まずい…

これは非常にまずいぞ…

「あー…つまりね…」

一也は鋭い視線で俺を見ている。訝しげな疑いをかけた瞳をして。

「ほんと保健室に行ってたんだよ…眠すぎて…」

俺はその視線からすり抜けようと、するりするりと視線を反らす。彼を騙す罪の意識を感じながら。

「じゃあ、なんで始めから言わなかった？」

それを追うようにして、一也はじつと俺を見る。

「普通に言えることだろ？」

訴えるような痛い目をして。

一也はたぶん気づいている。

俺が昔から何かを抱えていて、それを必死に隠そうとしていることを。

「だから…」

俺が答えようと口を開いたそのとき…

「春人くんっ！」

ふいに少女の声がした。

聞きなれた、透き通った声。

「良かったあ、見つかって。ずっと探してたの。」

彼女は教室の入り口の前に立ち、にっこりと微笑んだ。ウェーブのかかった栗色の髪がふんわりと揺れる。

「…あやの？」

一也が俺から視線を反らす。

「なんであ…文無月が…」

それから俺にもごもごと問いかけた。

「ハルを名前で呼ぶんだ？」

さっきよりも訝しげな、驚いた顔をして。

「俺が聞きたいよ…」

俺もぽかんと、微笑む文無月綾乃^{ふなづきあやの}を見つめていた。



文無月綾乃。

俺たちと同じ豊穰学園高等部二年で、生徒会書記を務める活発な少女。

生徒会長の一也とは幼馴染みで、親しい仲。

よく共に活動しているのを見かける。

二人寄り添うようにして、柔らかな笑みを浮かべて。

俺はその光景を見る度に、甘くむずがゆい気持ちになった。

言い知れない憎悪と羨望。

一瞬にして、一也を嫌いになった。

「春人くん？」

その彼女が今、俺の名前を呼んでいる。

一也を呼ぶのではなく、俺を。

訳が判らない…

一也を呼ぶなら判る。

日常茶飯事なことだから。

だが、俺は彼女に呼ばれるような仲じゃない。

顔見知りではあるが、挨拶程度の会話を交わすぐらい。

それなのになぜ俺を『春人』と呼ぶのだろう…

一体なぜ？

九巻 甘酸っぱい彼女の微笑み（後書き）

なんだか春人が可哀想ですが、設定的にしようがないんです（へ
ー；）

次回は葉詩も登場して、今よりどたばたになりそうです（笑）
またよろしくお願いします！

十巻 怪し悲しき彼女の正体

「春人くん、行こう」

「へ？」

俺が呆然としていると、いきなり文無月さんが腕を捕んだ。

「ね？行こう」

彼女はにこにこしながら、腕を引っ張る。

「行くってどこに…？」

「いいから、来て」

笑いながら、強引にどんどん腕を引きずっていく。中間休みの今、教室にいるたくさんの生徒が面白そうに俺達を見ている。

なぜかいつもと雰囲気が違う気がしたが、気のせいかな？何か文無月さんらしくない。

「文無月っ…」

一也が困ったようにこちらを見ていた。

俺が困っているぐらいだから、当たり前か…。

「…。」

文無月さんは一也を無視して、どんどん進んでいく。

「…あやの…。」

一也はそれを追いかけるように文無月さんの名前を呼んだ。

普段一也が文無月さんの名前を呼ぶことなんて、そうそうない。

それが今日は二回も呼んだ。

どうやら一也は酷く混乱しているらしい。

「何？瑞ノ江」

文無月さんは顔色一つ変えず、にこにこしたまま答えた。

「おま…」

「あとでね」

そして、今度こそ一也に背を向けてすたすたと教室を出て、廊下を歩いて行く。

その歩調は軽やかで、一也のことなど気にしてないようす。

ほら…

やっぱりいつもの文無月さんじゃない。

俺は小さくなる一也の姿をぼーっと見ながら考えた。

文無月さんが一也を無視することなんてないし、名前を呼ばれて顔色を変えないはずがない。

やっぱり変だ。

「ちょっと強引でしたわね」

少し廊下を歩いて、文無月さんがぽつりと呟いた。

「ですが、しょうがなかったんですわ。お許しを。」

俺はきよとんと彼女の顔を見ながら、一人溜め息をついた。

そういうことか…

違うに決まってるじゃん、

馬鹿だ、俺。

「あと少しですから、お待ちくださいね。」

今、目の前で笑っているのは文無月さんじゃなくて、俺が大っ嫌いな化け物の…

「春人さん」

葉詩だから。

十巻 怪し悲しき彼女の正体（後書き）

というわけで、綾乃は葉詩でした（へー）☆
春人がまたまた可哀想ですが、しょうがありませんよ、やっぱり（笑）

瑞ノ江に誤魔化すのがまた大変だな、春人は：

次回は葉詩の依頼に深く触れ始めます。
またお願いしますね！

十一卷 見破られた心の中（前書き）

書きそびれましたが、

葉詩のかぎかつこが『から』になったのは、人間に化けているからです（^| ^;）

もとの化け物に戻れば、『に戻ります…

紛らわしくてすいません！

十一卷 見破られた心の中

「放せよ…」

俺は葉詩に捕まれた腕をぱっと突き離れた。

「どうしましたか？」

葉詩はいつもの口調に戻り、のんびりと話した。

「どうしたじゃねえよ。」

なんでお前が学校にいるんだよっ」

イライラとした気持ちを必死に抑える。

何が楽しくて化け物と歩かなきゃいけないんだ…

このままだと頭がパンクしそうだ。

「まあ…

先ほどと随分言葉遣いが、異なっておられますのね。面白いですわ、春人さん」

葉詩は文無月さんの顔で、くすくすといやらしい笑いをした。

「その顔で話すの止めてくれる？気持ち悪いんだけど」

「しょうがありませんわ、

ここは無人の集団の場ですもの。

無人の姿にならなければ、春人さんとお話しできないでしょう？」

確かにそうだ。
でも…だからって…

「だけどその姿でいる必要はないだろう」

そうだ。

よりによってなんで、文無月さんに化ける？

「春人さんがいけないんですわ。」

「は？」

堰を切ったように葉詩は話し出した。

「いきなりあの場から逃げてしまわれましたでしょう？」

途方に暮れたわたくしは、春人のさんの言葉の記憶を読み取り、この姿に化けたのです。」

言葉の記憶…？

なんだ、それ。

「判らないようですね、言葉の記憶。」

簡単に言ってしまうえば言葉から頭に浮かんだものを読み取るんです。」

「

言葉から読み取る…

つまり夢見みたいなものか。

「春人さんが『学校』と口にされたとき、浮かんだのはこの娘の顔

でした。

わたくしたちは無人について詳しく知りません。
だから、この娘に化けたのです。

もちろん春人さんの言葉の記憶を参考にして。」

葉詩はのんびりと先を続ける。

「そして学校とやらに向かった…それだけのことでござすわ。
何かございますか？」

「・・・なんで俺を『春人くん』と呼んだんだ？」

「はい？」

「文無月さんは俺を『春人くん』とは呼ばない。
言葉の記憶で彼女を詳しく知っていたのに、なぜ『春人くん』と呼
んだ？」

細かいことだが、おかしいんだ。
さつきから気になってしょうがない。

「簡単なことですわ。春人さんがこの娘に呼ばれた記憶が見当たら
なかったんです。」

え？

「だから、適当に呼んでみただけですわ。」

ええ？

「何かございますか？」

パニックを起こした頭でよくよく考えてみると、文無月さんに名前を呼ばれた記憶がないことに気づいた。

いつも「あ。おはよう！」とか、「瑞ノ江いる？」とか、そんな会話ばかりだった。

なんつうーことだ・・・

俺は勝手に文無月さんに呼ばれるところを想像してたのか・・・
とても痛い少年じゃないか・・・

悲壮にくれる俺を見て、葉詩はにやにやと顔を歪める。

「春人さんにとって学校は、この娘に会うための場なんですね…」

生徒の声が響く廊下の端で俺は顔を真っ赤にしながら、葉詩の話を聞いていた。

十一卷 見破られた心の中（後書き）

本題に入れませんでした。（＋――＋）次回こそ入ります！
ろしくお願いいたします♪ またよ

十二卷 親切心は嵐を呼んで

「春人さん、わたくしの依頼、聞いてくださりますよね？」

頬を紅潮された俺をよそに、葉詩はいよいよ本題に入った。

くりくりとした文無月さんの瞳が、今はギラギラと獲物を狙う瞳になっている。

「はぁー…」

正直、聞きたくない。

とゆうか、まずここから逃げ出して一也に誤解を解きたい気分だ。

「いいですよね？」

春人さん」

なおも首をたてに振らない俺に、痺れを切らした葉詩が話しかけた。怒りと焦りが混じった恐ろしい顔をしていて、それはもう化け物そのものだった。

「わかったよ…話せよ…」

最早逃げ場のないことに気づいた俺は、浅はかな気持ちで頷いた。



「お分かりだと思いますが、わたくしの依頼は夢写しで視られた童

を助けて頂くことです。」

廊下からカフェテラスに移動した俺たちは、コーヒーを飲みながら話していた。葉詩は文無月さんに化けるのを止め、どこかのクラスの子に化けている。

「あの童は今、化のほとりにいます。

化のほとりは化け物たちの里。

あの童はそこに迷い込んだただの迷い子です。

自ら化のほとりから抜け出すことはできません。

だから、春人さんに助けて頂きたいのです。」

その顔に似合わない口調ですべてを話した葉詩は陰鬱そうに下を向いている。

それはただ哀しみに打ちひしがれた子供の顔で、とても化け物だとは思えなかった。

「で、どうすりゃいいの？」

協力する気なんてさらさらなかったが、葉詩があまりにも哀れに思えて、思わず口走っていた。

「承けてくださるのですね?!」

「ああ…」

歓喜に満ちた葉詩はすぐさま今後の動きを話し出した。

十二卷 親切心は嵐を呼んで（後書き）

やあーとっ 本題に入れました！ここまでお付き合いくださり、ありがとうございます！今後ともお願いいたします☆

十三卷 出会は常に突然の事

「まず、春人さんに、夢を渡っていただきます。」

夢を渡る…？

一体どういうことだろう。

「今まで春人さんには、夢写しで異界を視て頂きました。繊細に、鮮明に。」

ですが、今回は『視る』だけでは何もして頂けません。

『入って』頂かないとなりません。」

『入る』……

「つまり異界に行く…？俺が…？！」

鳥肌がたった。

あんな奇怪なものが溢れる場所になど、行きたくない。

俺は人間だ。

日常を愛する高校生だ。

化け物なんかじゃない。

非日常なものを受け入れるのでさえ、苦勞していると言うのに、今度はその行けだど？！

ふざけている…

「お願い致します！」

春人さんがわたくし達をお嫌いになっていることは、重々承知しております。

ですが、今回だけは……今回だけはわたくし達の元に来て頂けないでしょうか…

あのことを、助けて頂けないでしょうか…」

葉詩は苦しそうに唇を噛んだ。強く、強く。

すると微かに血が滴り、

彼女は息を詰まらせたように、口元を拭った。

よく見ると手のひらをぎゅっと握っていた。

未だに化け物は人の血液に弱いと言うのか。
そして、『子供に弱い』とも。

昔、祖父から聞いたことがある。

化け物の中には子供を愛するものがあると。

子供を敬い、大切にし、陰からそっと見守る暖かなものがあると。

疾風丸としての使命を受け継いだ俺に、祖父はそう言った。

『恐れることはない。』

お前のもとに来るものは、悪いものではないだろう。
人を敬い、距離を置き、陰の世界を支える美しいもの達だ。

だから、安心しなさい。

きつと大丈夫だ。』

俺の頭を優しく撫でて、うつすらと夕闇に溶けていった。
祖父の通夜での出来事だった。

「春人さん：」

目の前にいるコレは果たしてどうだろう。
人を敬い、大切に作る美しいものだろうか？

子供を愛し、異界を支えるものだろうか？

解らない…。

今まで触れたものたちは、
みな些細な願いを求めて俺のもとにやって来た。

異界に触れるような危ない願いは一つもなかった。

だから俺は異界というものを知らない。

何が起きるか、何が壊れるか解らない。

それでも俺はコレを助けなければならぬのだろうか。

いくら使命とは言え、拒むことは出来ないのだろうか。

どうすればいい？

俺は深く頭を捻った。

十三卷 出会いは常に突然の事（後書き）

お久しぶりです！初めての方もお久しぶりな方もここまで読んでくださってありがとうございます。次回からまた少しずつ進めていくので、よろしくお願い致します☆

十四卷 当たり前前の食物連鎖

そもそも『異界』とは、どのような場所なのだろう？

化け物の棲処？

化け物の溜まり場？

化け物と人との架け渡しの間？

正直、すべてが当てはまるような気がして、すべてが当てはまらないような気がする。

空想の世界でしかなかった場所を、いざ現実として見ろと言うのは非常に難しいことだ。

特に俺のように化け物や異界を、否定してきた者にとっては。

「どうしても行かなきゃならないのか？」

「はい…」

童が餌にされてしまうのは時間の問題です。

あれらはそろそろ音を上げて、あのこを食い尽くしてしまうでしょう。」

「食い尽くす？」

俺の頭に浮かんだのは、残酷な血み泥の描写だった。
まさか…あの子を…

俺の顔は真っ青になった。身体中にぐっしょりと汗をかき、嫌な悪寒が胸を焦がす。

葉詩はそれを見て、眉根一つ動かさず自然に答えた。

「お考えの通りです。

魂も身体もあれらの血となり、肉となってしまうことでしょう。貴方たちが生き物を喰らうのと同じように。」

葉詩は淡々と答えた。

感情は一欠片もなく、まるで機械のようだった。凍ったような冷たい声が耳に痛い。

「だっ…だけど…」

全身から血の気が失せた俺はまともに話すことすら出来ない。

頭の中に想像した残像が、植え付けられ、気持ち悪くて仕方がない。

あの子が…

あの子が…

あの子が………餌になる…

そんなことあり得てたまるか…！

「何を驚いていらっしゃるのですか？

当たり前のことでしょう。

貴殿方が食事をするように、わたくし達も食事をします。
三食きっちり好きなものを頂きます。

それが人間であって何が可笑しいのですか？
人間は食物にならないとでもお考えですか？

これも一つの世界連鎖なのです。」

食物連鎖…？

今まで考えたことがなかった。

人を喰らう化け物は悪いモンスターで人の敵。
だからやつつけなければ、ならない。

子供心に思った化け物に対する強い恐怖と憎しみ…

だけど…

当たり前の自然現象だったのか？

「春人さんがどのようにお考えかは存じませんが、異界はわたくし
たちにとって空想などではありません。

わたくしたちが生きるための世界。現実の艶やかな場所。

人間がこの世を現実だと思うように、化け物も異界を現実だと思っ

ておりまする。

そして、この世を空想だとも。」

葉詩の言葉を全て聞きたくない…
全て理解することが出来ない…

俺は理解したくないんだ。

聞きたくもない。

俺はここを必要としているから。

「現実なんて所詮、嘘の塊。

視るものによって変わり、視るものによって創られる。

それを否定し、抹消することなど誰にも…いえ世に生きる物になど
出来やしません。」

そこでふっと葉詩は息を吐き、歌うように呟いた。

「出来るとすれば、それは神と呼ばれる幾多の世界の創造者だけ。」

十四卷 当たり前前の食物連鎖（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございました。次あたりから、春人が異界に行くはずです…またよろしくお願い致します☆

十五卷 少年の悩み

結局、俺は葉詩に不確かな返事をして、クラスに戻った。

あのあとタイミング良く、授業開始を告げるチャイムが鳴り、俺は都合良く話を打ち切ることが出来た。

葉詩は責めるような酷く乱暴な口調で、

「判りました。」と言い、元の姿でカフェテラスから去っていた。

そして今、俺は自宅のベッドに寝そべり呆然と天井を見つめている。

「具合が悪い」と嘘をつき、学校を早退してきたのだ。きっと一日学校で過ごせば、放課後あたりにふらりと葉詩が姿を表すことだろう。

そしてあの少年を助けるように、くどくどと願いかけてくることだろう。

それを考えると吐き気がして、すぐに家に帰りたくなった。

気づいた時にはもう、嘘で固めた言い訳を教師に話していた。帰り支度をきちんと済ませて。

そして今に至る訳だ。

単純に考えれば、上手く葉詩から逃げられたし、一也と顔を合わせずに済むのだから、良しとしても良いのだろう。

だが、深く考えれば、自分の軽率な行動に頭が痛くなる。

完全に葉詩から逃げられた訳じゃない。

たまたま見つからなかっただけで、いつひょろりと現れるか判らない。

最悪の事態に陥れば、家に押しかけてくるだろう。

悲しいことに住まいはばれてしまっている。

実は葉詩を視るのは俺だけじゃない。六つ離れた弟の陽一が最近、視えるようになってしまったのだ。

原因は俺が助けた化け物が、礼のつもりで陽一の靈感を強めたことにあるようで、それを元に戻すことは不可能だった。

陽一はまだ小学五年生。

化け物を受け入れるどころか、急に視えるようになった不思議生物を恐れ、その根本とも言える俺に近寄らなくなってしまった。

彼は俺が好んで化け物を連れていると思っているらしく、俺までも恐れている。

そして残酷なことに、専ら近づこうとしない訳だ。

最近じゃ居候になった一也を兄のように慕っていて、実の兄としてはなんだか寂しくて仕方がない。

だから家に押し掛けられては困る。

これ以上、弟に嫌われるのはごめんだ。

もともと靈感が強いうちの家系で、陽一のように化け物を視る者が生まれても可笑しくはない。

それが化け物に育てられた遅咲きの花だとしても、ごく普通のことだ。

それをよく理解していたのに、俺が奴らを招いてしまったから（実際には押し掛けられたのだが…）陽一を怖がらせることになってしまった。

小学五年生と言ってもまだ子供。

陽一は必要以上に奴らを恐れて、いつも不安を抱えている。

それを見る度に申し訳ない気持ちで一杯になる。

まるで幼い頃の自分を見るようで、狂おしい程に胸が締め付けられる。

だから：
これ以上、家を巻き込みたくはないのだ。

十六卷 寄り道と少年の悩み

「はる、また塩を盛っているの？」

ふいに母の声がした。

部屋のドアを見ると、買い物帰りの母が、袋を提げて立っていた。

「…塩の前に息子の早退を心配しろよ」

「どうせまた、気分が悪くなった、でしょ。」

サボってばかりの息子を心配するほど、私は寛大じゃないの。」

語尾が荒く、少々、お怒りのご様子…これは下手に話さない方が身のためだな…

「寝るから。」

夕飯になったら起こして」

上手く話を逸らそうとしたが、見事に突っ込まれた。

「そうやって話を逸らさないの。はるの考えていることなんてお見通しよ。」

ちゃんと言ってくれないと判らないでしょう。

なんで塩を盛っているの？また憑かれたの？」

母は化け物を視ることはないが、その存在を認めている。

それは祖父母が亡くなる前に、憑き物払いをしていたのが関係しているのだろう。

逆に理科教師の父はそれを全面に否定し、幼い俺を精神鑑定に連れていった。

父は悪い人じゃないから、あるとき黙って言うことを聞いたが、未だにそのことを後悔している。

あんなに恥ずかしい思いをすることは、もう一生ないだろう。

「はる？聞ってるの？
ちゃんと答えて。」

母の声で現実に戻された。

「前にも言ったけど、塩にも盛り方があるの。
それを間違えると逆に呼び寄せてしまうって言ったわよね？
はるが化の者に好かれる体質で、悩んでいることは知っているけど、
勝手なことをしてはダメよ？」

母には、化け物に好かれやすいため困っている、としか話していない。

祖父に、あまり俺の使命を人に話すな、と言付けを受けたからだ。

「…ちょっと追いかけられたから…家に連れて来たくなかったし…
ごめんなさい。」

「判ればよろしい。

私がちゃんと直して置いたから、心配することはないわ。

今日は顔色が確かに悪いから、休みなさい。

あとで薬を持ってくるから」

なんだかんだ言って、母は優しい。

化け物のことを理解した上で、深く探ってこないことも、むやみに人にそれを話さないことも、非常に助かっている。

「母さん下に行くから、パジャマに着替えて寝るのよ？」

そろそろ陽一が帰って来るから、うるさくなるから」

「母さん」

ドアに手をかけた時だった。

「なに？」

数分躊躇ったあと、恐る恐る聞いてみる。

「陽一は…俺が嫌いだよな」

顔を見られないように、母に背を向ける。

母はふっと息を吐き、ベッドに腰かけた。

「なんでそう思うの？」

不安げなその声に背中を押され、そっと呟いた。

「……陽一が視るようになったのは…俺のせいだから」

「……」

「だからきつと、あいつは俺が憎くて、嫌いだ」

きつと前みたいに話してはくれない。

兄ちゃん、兄ちゃん、って笑ってもくれない。

このままずっと避けられたまま、歳を重ねてあいつは大きくなる。

寂しい。

すごく寂しい。

俺はあいつの兄ちゃんなのに…

「春人、こっち向いて」

「…何？」

振り向くと、微笑んだ母がいた。

「今の陽一の目標を知ってる？」

「え？」

「弓道を始めるんだって、豊穰学園の中等部で」

母はにっこりと微笑み続ける。

「自分の身を守るそうよ、弓道で。なぜだか判る？」

「…あれが…怖いから…？」

首を傾げながら答えると、母は微かに笑った。

「ふふ。違うわ。

春人がそうしてるからよ。

弓道には邪を払う力があるんでしょう？

自分を守ることも出来る。

あのこは前に春人が話していたのを覚えていたの。

春人が一生懸命弓道を練習して、上手くなっていったのも知っているしね」

まさか…

「だから、兄ちゃんみたいに強くなるんだよ、化け物に負けないように。」

それに弓道で大会に出て、兄ちゃんと勝負したいんだ。

俺は兄ちゃんみたいに名手になりたい」

いつのまにか微かにドアが開かれていた。

驚いた母と顔を見合わせると、ランドセルをしまった陽一がそろりとして入ってきた。

「何だよーその顔。」

帰って来て、おやつ食べようと思ったら、お母さんいないんだもん。玄関に兄ちゃんの靴があったから、二階に上がってみたら、二人で話してたから、待ってたんだよっ」

頬を赤く染めて、照れた陽一は怒りの声を上げた。

「べっ：別に立ち聞きしてたんじゃないからな。」

お母さん待ってただけだからな：

それと兄ちゃん！」

ビシッと俺を指差す。

「俺、化け物のことで兄ちゃん避けてるんじゃないから！」

兄ちゃんが佳奈ちゃんに余計なことしゃべったから、かず兄に相談してただけだから！」

「かな…ちゃん？」

頭に『？』マークが浮かんで、ぼけっとしていると、陽一が怒りを爆発させた。

「『かな…ちゃん？』じゃないだろおー！！」

兄ちゃんがこの前、うちに佐々木さんが来た、なんて佳奈ちゃんに話しちゃうから、佳奈ちゃんに嫌われたんだよっ！」

佐々木さん…？

佳奈ちゃん…？

誰だそれ？

「ハルは馬鹿か…？」

いつの間にか一也まで帰って来ていて、一部始終を耳にして呆れていた。

「早退したと思ったら、馬鹿なこと考えて、麻奈おばさんに迷惑かけて、

陽一怒らせて…全く」

麻奈おばさんとは母のこと。
母は麻奈美と言う。

「や、えーつと状況が…」

頭をかく俺に一也と陽一が

「馬鹿。一生悩んでろ」、

「兄ちゃんなんか化け物に連れて行かれちゃえ！」と捨て台詞を吐いて、リビングに降りて行ってしまった。

母だけが俺に、

「大丈夫。はるは少し鈍感なのよ」と

困ったように笑って、

「あとで二人に謝りなさい。あれでも心配してるんだから」と言っ
た。

「何なんだ…？」

俺はぼけつと頭を働かせた。

十六卷 寄り道と少年の悩み（後書き）

長くなってしまう……それもあまり話しに関係しない……まあ春人の日常的な感じで楽しんで頂けたら、嬉しいですよ。

十七卷 迷い込んだ禁断の場所

『……て……けて』

濃紺の闇の中に、艶やかな光が見える。

『……けて……すけて』

異国の笑い声と割れるような音色。

一本のたいまつがもたらす艶やかな光は、化け物達を好調にし、興奮させた。

くるくると大きな輪を描けるように、化け物達は踊り続ける。

しきりに中心に置かれた等身大のたいまつをそろりと直視し、ニタリと顔を歪ませながら。

『たすけて…たすけて!!』

何かと、たいまつをちらりと見れば、あかぎれで血を流した痛々しい少年が叫び声を上げている。

『たすけて…たすけて!!』

麻で出来た粗末な服は微かに火の粉が移り、小さな小さな炎が少年を包み込んでいる。

よく見れば、手足に大きなみみず腫が出来ていて、怪しげな真っ赤な膿が、肌からだらりと零れていた。

『クク…叫べ！叫べ！』

『お前が声を枯らさない限り、炎は光を宿し続け、我らの祭は終わることはない。』

『お前の命も消えやしない。』

『高貴なものを奪った罰じゃ。存分に恐怖に溺れ、我らを悦しませておくれ…』

ゆらり…そろり…

叫び続ける少年に化け物は唄うように、言葉をかけた。
歪んだ笑いを張りつけて、恐怖に身を縮ませる少年を面白そうに眺めながら。

残酷だ…

これ程酷いことはない。

俺はゆっくりと木の影から足を踏み出し、そっと化け物達に近づいて行く。

気づかれないことを知りながらも、少年をなめまわす化け物の顔が恐ろしくて、そっと彼らの群れに入った。

『たすけて…たすけて!』

『叫べ! 叫べ!』

『お母さん…お父さん…』

『良いぞ! 良いぞ!』

宴を盛り上げよ!』

いよいよ祭は盛り上がり、化け物達の狂気の声が響き渡った。
暗い森をいつそう闇で包み込み、艶やかな光をいつそう輝かせた。

そのなかを這うようにして進む俺に、化け物は一人として気づかない。

皆、愉快に唄を歌い続け、軽やかな足取りでステップを踏み続ける。

そつとだ…そつと…

俺は体を柔らかく折り畳み、たいまつの前へと輪をぬっていった。
背中に炎が煌々と燃えているが、魂の身体の俺には熱さなど感じることはない。

やっとたいまつの前真前に辿り着き、くくりつけられた少年を眺め

ると、彼は驚いたように瞳を開いた。

『……なっ…なんで…!!!』

俺は彼に見つめられていることに気づき、身を隠すため炎を飛び越えようとしたが、遅かった。

『待って…!!!行かないで…!!!』

「ぐっ…」

ふいに蔦のようなものが、少年のふところから伸び、俺の手足を縛り上げた。

『なんじゃ!なんじゃ!』

瞳をくるくると動かして、化け物達は俺を探すが、彼らの瞳には何も写らない。

いや、あのこにだって俺は写るはずはないんだ…

それなのに…なぜ…?

体をばたばたと動かし、

絡まった鳶を引き剥がそうともがいたが、頑丈な鳶はピクリとも動かない。

『お願い…たすけて!!』

少年は声を上げ続け、俺を必死に求め続ける。

『お願い…お願い…』

その声に耳を貸しそうになったが、右手の痛みが目が覚めて、俺は彼を振り切った。

「駄目だ…離すんだ…!!」
俺は君を助けられない。」

『なんで…!!』

少年の瞳からは涙が溢れ、乾いた頬を湿らせた。

俺は急いで体を翻し、もと来た道へと歩を進ませた。

『なんで…
なんで裏切るのっ…!!』

煌々と炎は燃え続け、唄は止まない。
笑い声と賑やかな叫び声が聞こえる。

そのなかで少年の叫び声だけが、俺の鼓膜を支配していた…

十七卷 迷い込んだ禁断の場所（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございました（^O^）次回もお楽しみください！

十八卷 少年の決意

はあー…はあー…

荒い息を吐きながら、ぐったりと瞳を開いた。

体制をゆっくりと起こし、辺りに広がる景色を眺めた。

はあー…はあー…

瞳はおぼろげに自室を写し、右手首から走る痛みを捉えた。

「くっ…ああ…」

いつもより寸断に腫れ上がったその傷に、体は耐えることが出来ず、悲鳴を上げた。

「…っうー…」

傷が癒えることを必死に願いながら、叫び出しそうな唇をきつく噛み締めた。

痛い…

痛すぎる…

はあー…はあー…

近くに転がっていたスポーツ飲料を手に取り、ぐっ。っと一気に流し込んだ。

はあー…はあー…

生ぬるい液体が喉を潤し、傷ついた体を癒していく。重たい体が楽になるまで、俺は体制を崩し、瞳を閉じた。

あれは一体……

なぜ俺が見えたんだろう…

今さっき起こった夢の中の記憶を、手繰り寄せるように引き出していると、ふいに聞き慣れた声が耳に響いた。

『お願いします…あのことを助けてください…』

幻聴と知りながら、その声に耳を澄ませる。

方位に塩を盛ったこの家に、化け物が姿を表すことはない。結界を張られたこの家を彼らは視ることが出来ない。

『あのことを…あのことを助けてください…』

だが、その声はありありと耳に響き、俺を奮い起たせた。

あのこはまだ死にはしない。

声を上げ続ける限り、餌にされることはないだろう…

だけどそのあとは…？

声を上げられなくなった時は…？

頭の疑問を全て抱き抱え、俺はそつと自室の扉を開いた。

さっきまでじりじりと響いていた右手首の傷跡は、嘘のように真っ白な肌に戻っていた。

十八卷 少年の決意（後書き）

やっと春人が動き出してくれました（^―^）あー良かったです！
（笑）また次回もお楽しみください！

十九卷 嵐の前の平和な一時

「あれ、兄ちゃん。
体調いいの？」

リビングに降りると、野球アニメを見ていた陽一と、数学を解く一也がいた。

「凄い汗だな…
また夢にでもうなされたか？」

少々笑みを含み、だが、心配そうに一也が俺を眺めた。

「や、起きたら汗かいてぐっしりだったから、別にうなされた訳じゃない。

風呂入ろうと思って降りてきた」

「なら、いいけど。
そろそろ文無月が来るから早く入っちゃえよ」

ふなづき…？

俺の頭が爆発しそうになった。

「なんでうちに文無月さんが来るんだよっ」

血相を変える俺に、一也は涼しげに答えた。

「生徒会の仕事」

「俺にちゃんと言えよな！

馬鹿一也！」

「…いちいちハルに言う必要ねえーだろう…俺んちだし、ここ」

めんどくさそうに答える一也に少々、怒りを感じながら、本来の目的を思い出した俺は急いで風呂場に向かった。

葉詩を探すんだった…

やべえ、やべえ。

「十分程度で上がるけど、文無月さん、来ると不味いから、服だし
といて」

頼みかける俺に、冷たく一言。

「…やだ。裸でうろついてろ」

ぽんっとバスタオルを投げかける一也に、溜め息をつきながら、俺は二階の自室に服を取りに行った。



あのあと風呂に入った俺はさっぱりとした気持ちで四つ角に足を運んでいた。

風呂を上がった数分に文無月さんがうちに来て、

「あ。豊城くん。早退したんだって？体調大丈夫？」なんて声をかけてくれたもんだから、嬉しくって仕方がない。

今の俺なら、きっとなんでも出来るはずだ。

「おーい…葉詩いいー

俺が悪かった出て来いよー」

四つ角の壁に向かって声を上げる。

はたから見ればかなりの変人だが、しょうがない。

葉詩が居そうな場所と言ったら、ここぐらいしか思い付かない。

「おーい…出て来いよー」

努力虚しく、葉詩は見当たらない。

朝と言い、昼と言い、突然現れるくせして、なんで必要なときには出て来ないんだよ…

全く…

そういえば…

一也は文無月さんのことで何も言って来なかったな…

あいつの性格からして、絶対、問い詰めてくるはずなのになぜだろう…？

朝の俺、消失事件と言い、探求心の強い一也がおかしいなあ…

『当たり前ですわ！』

いきなり耳を貫く程の甲高い声が響いた。

『春人さんに不備が生じないようと、あそこにいた無人の余計な記憶を排除しましたもの！』

前方を見ると、ふわふわと宙に浮くライトグリーンの飛行物体が目に入った。

「あっ…葉…」

『それと、春人さん？

代わり身が消えたのは、わたくしの妖力が弱いからではありませんからね！

間抜けな無人が彼に大きな球をぶつけた上に、水を撒き散らし、汚れと一緒に流してしまっただけですわ！

葉で出来たものは、強い衝撃に弱いんですわ！

決してわたくしの妖力のせいではございませんっ！』

怒り狂う化け物を呆然と眺める俺に、彼女は、行きますわよ、と妖力をかけて、四つ角の中へと連れて行った。

二十卷 危険な掛け橋（前書き）

お久しぶりです（^・^）本文をお楽しみください！！

二十卷 危険な掛け橋

「うっ…」

葉詩に腕をぐいぐい引っ張られ、四つ角の中に連れて行かれた俺は、思わず立ち止まり吐きそうになった。

「なんだよ…この臭い…」

立っているのがやっと、と言うほどの強烈な異臭が鼻孔をくすぐる。生ゴミと、肉が燃えるような独特の臭いは俺に目眩を与え、ふらふらと壁に寄り添った。

壁はじとりと微かに湿っていて、少々気持ち悪い感触がしたが、文句は言ってられない。気持ち悪いながらも壁に手をつけて、体を支えた。

息づかいがなぜか荒くなっていた。

それでも剣道部主将…短時間歩いただけですぐに息が荒くなるはずはないのだが…

それに一歩歩くごとに目の前にもやもやとした何かが立ち塞がっている。

色のついた膜のような、手に取れない何かが…

目の前には楽しそうにふわふわと浮く葉詩が見えた。横顔を見る限り、表情は晴れやかで実に明快だ。

まるでおとぎ話に舞い降りた少女のように。

よくもまあ、こんな汚い場所であんな幸せそうな顔ができるよな…

改めて化け物の感覚に驚かされた。

『春人さん？早く！早く！』

ひらりと振り返った葉詩がぐだぐだの俺を見て、罵声を飛ばす。

『虫けらのようにへたれてないで、早く来てくださいな』

虫けらって…

おまえ、俺のことそんな風に思っていたのか…？

なんだか頭にきて、グイッと壁にもたれて、そっぽを向いた。

『どうしましたか？お顔を歪めて？まるで駄々をこねる童のようですわ』

立ち止まる俺を見るなりまた一言毒舌を浴びせる葉詩。

『もう少しですから、お歩きになってください。』

「…どこに連れていくつもりなんだよ？」

何も説明なく四つ角に連れ込まれた俺は、何も説明なくそのまま歩かされていた。

そのうち話し出すだろうと鷹をくくっていたが、何分経っても一向にその気配がない。

そのうえあの毒舌：

無性に腹が立って、

俺は立ち止まってしまった。

『今はお話できません』

けろりとした顔でやつは答える。

『ここはあちらとこちらの掛け橋の場所。』

善悪関係なく、さまざまな輩が利用しております。

中には私たちを邪魔しようとする、善からぬ輩もいるでしょう。

つまり、ここで話せばわたくしも春人さんも危険を受け入れるようなものと言うことですわ。』

「それを先に言えよ…」

『あら。わたくしはお話致しましたよ？春人さんもお返事なされたでしょう？』

「はぁ？一言も聞いてねえよ」

『可笑しいですわねえ…』

葉詩はくると首を傾げながらなめるように俺を見つめた。

『…あらら…なぜに妖風が春人さんから出ているんでしょうか…』

そして

さらりと中指と人差し指を絡めて、箱のような形を作るり、何やらじとりと俺を眺めた。

『ーおいでなさい…おいでなさい…』

紺碧の瞳に青白い光を宿して、射るように体の端々を眺めていく。口からは訳の判らない言葉を滑らかに発し、呪術のように俺を拘束した。

『…おいでなさい…おいでなさい…』

「あの…ちょっと…葉詩…？」

『…おいでなさい…おいでなさい…』

「や…もういいからさ…先に進まない…？」

『…おいでなさい…おいでなさい…』

「や…だからさあ…」

すう…

そこで急に葉詩は大きく息を吸い込んだ。

口は無意味にかっぽりと開けられ、大きく大きく…まるでその場の空気を全て吸い込むように使われた。

はあー…

一分少々経っただろう。

吸い込むのと同じぐらい長く、今度は息を吐き出した。

するとなぜか葉詩の口元から灰色の管のような異物が吐き出されたのた。

「は？ 葉詩、それ…」

『五月蠅えな。糞ガキが。せっかく生き血を吸ってやろうと思ったのに、葉の者が憑いてるとはな…勝ち目がねえじゃねえーか。てめえの憑き物に感謝しな。見逃したるよ。』

「あ？」

呆然とする俺の前で、

その管のような異物はどこにあるのか、理解不能な口でしゃべった。やつは言いたいだけ文句を垂らすと、俺たちが歩いてきた道へとするすると宙に浮きながら戻っていった。

「……………なに…あれ…？」

『耳塞ぎですわ』

「なにそれ？」

『耳を塞いで、音を聞こえなくし、慌てふためくうちに身体に寄生し、死ぬまで魂を削り続ける蟲けらです。春人さん前が霞んで見えただしょう？あれに取り付かれかけていたんですわ』

あっさりと答える葉詩：

『気がついて良かったですわ。そのままでしたら、死んでましたね。』

「はいいい！？」

恐ろしいことをさらりと言うと、葉詩はさっさと歩き出した。

俺はじつとりと背中に汗をかきながら、足早にやつを追いかけた…。

二十一卷 辿り着いた化の岸（前書き）

翠さんコメントありがとうございます！！すごく嬉しかったです。
本文をお楽しみください。 p（＾－＾） q

二十一卷 辿り着いた化の岸

『春人さん……非常に重たいのですが…』

「いやいや、葉詩さん、そんなはずはないよ」

『いえ…めっちゃ重たいのですが…春人さんのせいで…』

「いやいや、葉詩さん、そんなはずはないよ…」

『ですが春人さん…』

耳塞ぎの一件があつてから、俺は半端なく…いや物凄くビビってた。

足はすぐむわ、手は震えるわ、おまけに体全体が硬直して、まとも
に身動きが取れない。

これじゃあ、いつ襲われたって俺は天国行きだ。

いや、もしかしたら

「罪を償いきれていない。」とか何やらで地獄行きかもしれない…

俺の人生、こんな汚れた場所で終わるのか!?

それも大っ嫌いな化け物の餌として…。

あり得ない。

絶対にあり得ない。

あり得ちゃいけない。

なんで俺が奴らの餌にならなきゃなんねえんだ。

好きでこんな場所に來た訳じゃねえし、矛盾しているだろう。

だいたいにして、『俺』は化け物を助けてるんだ。

邪魔をしたわけじゃない、奴らを陥れたわけじゃない、今まで何百、何千と助けてきたんだ。

そりゃあ前世の俺が奴らに何か酷いことをしたことは知っている。

だけど…

だけどさあ…

俺は何にもしてないじゃん！！

恩を仇で返すようなこの状況ってどういうことなんだよ！！

『お気持ちちはよく判りますがねえ春人さん。

前世、現世、来世は繋がっているものなんですよ。

切っても切れない、持ちつ持たれずの関係。

つまりこの場でどう足掻こうと何も変わりはありませんし、死ぬときは死ぬんですわ。

ですからどうか、わたくしから降りて頂け…』

「なんで俺の頭ん中聴いてるんだよっ！！」

今まで軽く傾けるように乗せていた体を、葉詩に食い込ませるように体重をかけた。

ついでに薄い羽のようなものを軽く引っ張ってやった。

『痛っ！！何するんですか！？』

春人さん！？わたくしを殺す気ですか！？

痛めつける気ですか！？

お体を退けてください！！

羽根を引っ張らないでくださいまし！！』

葉詩は俺に潰されかけている体を小さな羽根でぱたぱたと上に持ち上げながら、じたばたともがいた。

ついでに腕や足で俺をこずくものだから、痛いわ、くすぐったいわで体勢があれよあれよと可笑しくなっていた。

そしてのし掛かったつもりが、そのためなんと木から落ちかけている猿のような無様な格好になってしまった。

「動くなよっ…落ちるじゃねえーかつ」

『動き…ますわよ…落ちて頂かないとなりま…せんから……』

ぜえぜえ息を吐きながら、葉詩はぐいぐいと抵抗してくる。

その度に体が微かにふわりと浮いて、ついドキッとしてしまった。

あまりにも小さ過ぎるその体で、どうやって俺を落としているのか教えてもらいたいぐらいだった。

『……見くびら…ないで…くださいまし…わたくしはいちおう化け物なんですから…これぐらい……容易いことですわ…!!』

「え？」

瞬間俺はひらりと宙に浮いていた。

薄暗い汚らしいこの空間を。

体が前につんのめり高い位置から一気に落下していく。

『見くびるなと言いましたでしょう』

なぜか冷えた葉詩の声が真上から聞こえる。

『小さいからって馬鹿になさると痛い目をみますわよ』

ついでに言えば揺り動かす微かな羽音までも聞こえる。

『さて、行きましようか、春人さん？』

「行くって…うわああああ!!」

急降下で体が落ちていく。

それはもう一瞬のうちに。

回りの景色なんて見えたもんじゃない。

視界は真っ白で頭も真っ白だ。

『あらあら…随分と無様な様子で…』

葉詩が何か憎たらしい事を言っただけだが、全く判らない。

つうーか聞こえない。

耳は風が生み出すゴウゴウと言う異常なうねり声と自分の叫びしか捉えてない。

「うわああああ!!」

ヤバイヤバイヤバイヤバイ…

ヤバイって!!

俺死んじゃう!!

地べたにべっちゃってなって死んじゃう!!

ちよっマジで助けて!

『騒がないでください…大丈夫ですから』

気圧に空気が潰されて息が出来ない。

朝食べた食パンが胃から飛び出しそうだ。

『もうすぐ着きますよ。』

どうせここから下に落ちていかなくてもはならなかったんですもの。

荒業ですが、わたくしの上に乗って下さって助かりましたわ。

春人さん臆病者の顔をしていますから、飛び降りるのは無理だったでしょう。

きつと。』

喉もとまでパンが…いやそんな事より視界が薄らいで来たような…
そうでもないような…

『そこまで頭が回れば大丈夫ですわ。』

普通の方は気絶されますもの。

やはり丈夫な方ですわ。』

体は急降下したままみるみるうちに地面に近づいていく。

瞳には写らないが、気圧の変化からそれが判る。

それから多分側には呑気な葉詩が同じく落下している。

時折微かに話し声が聞こえるから、ぶつぶつ何か話しているのだろう。

そんな余裕があるならさっきの馬鹿力でこの落下を止めてくれ…
妙に頭がはつきりして、
気持ち悪いぐらいに冷静になってしまった自分をどうにかしてくれよ…

すげえ怖いのに、状況を回避するように頭が働いて吐き気がする…
もう食パンが口元まで…きて…るんだけど…

『はい。到着ですわ』

ふいに加速が緩み、体がふわっと宙に浮いた。

『やっとここまで来れましたわ。

お疲れ様でございました。

長い長い空中浮遊はいかがでしたか？』

視界がはつきりと見える。

色が…鮮やかな色がちゃんと見える…

もうぐにやりと曲がった景色じゃない…

『お話を聞いてくださいます…よく判らない事で感動されるのは結構ですが、そろそろ地に足をつけますよ？宜しいですね？』

「あ？」

またゆっくりと体が浮き、今度は滑らかに、息が出来る速さで地面に落下していく。

少しずつ近づく地面がぼんやりと見えた。

『春人さん、ここからが本番ですから、油断してはなりませんよ。』

忠告らしき葉詩の声を聞きながら、一体何を言ってるんだろうと俺は考えて、ぼっーと真上を見上げていた。

あれはなんだろう…

大きな通気孔のような広い穴…

『ここからはわたくしたちの本拠地…何が起こるか解りません。わたくしから絶対に離れないでくださいまし。』

「んー…？」

ぼやっとベールに包まれるように瞳が揺らいだと思ったら、ぐらっと頭が傾き、鋭い痛みが頭蓋骨を刺した。

「うっ」

それから葉詩の手にもたれるようにして、いつのまにか深い深い眠りに落ちていった。

『あららら…人間はやはりか弱いすわね…今はつかの間のご休息を。』

意識が完全に閉じる前に、葉詩の柔らかな声が耳にすりと入ってきた。

『…アヤカシの世界へようこそ、春人さん』

瞼が閉じる直前、珍しく優しげな葉詩の微笑みを見たような気がした…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9682e/>

春色幽化帳

2010年12月24日02時24分発行